

毎日歌壇

加藤 治郎 選

乗ればすでに4のボタンが押してあるエレベーターで4階へゆく 新座市 睦月くらげ
 △評▽不思議な状況だ。下の階から乗った人がすでに4階のボタンを押していたのか。遠くしたような強さが作者にはある。

ポータートイレの手すりにチヨさんの目葉三匹危うく並ぶ 広島市 堀 眞希
 △評▽目葉が昆虫か金魚のように見えたのだ。匹という数え方が比喩になっている。

信号を渡れば信号は見えなくなって街はどこにも辿り着けない 奈良市 古井さらさ
 「サシエってなに」母に尋ねたときのパニラの香りが駅のエレベーター 入間市 しらい明明
 日曜の光が部屋をあたたためてホットケーキのバターを溶かす 名古屋市 森本 有

一万の薔薇が気化した庭園の片道切符まだありますか 大津市 世田 夏雪

こんなにも広い畑にひっそりと蕎麦の花咲く ひっそり揺れる 会津若松市 ともりゆめ
 モト彼にいつかバツタリ会う日など無いのに 今日もクリームを塗る 横浜市 荒田絵里子
 あまりにも甘い吐息の絡み合うふたり横目に (私は力・イ・シャ) 狭山市 りんか
 古老の洗身介助や懸命な吾に向け言う諸洗いだ 須崎市 野中 泰佑

水原 紫苑 選

白薔薇の兵隊たちがおしよせておしよせて無血のバルコニー 加古川市 石村 まい

△評▽人間よりもおそろしい、白いバラの美しい戦いに出会うバルコニー。行ってみよう。

生きていくかぎり苛むことになるという 墨の野辺を歩めり さいたま市 雨谷 詩穂
 △評▽誰が誰をさいなむのか。生きていくかぎり、全員である。

金継ぎの陶器で踊る少女には永遠に光る傷がいくつも 横浜市 砂月 七
 暮れやすい曇天の日の秋のなかポール・セザンヌ灯火として 大阪 中村 杏
 少年が自転車に追いついていく光のような身を震わせて 岡山市 松井 度

潮騒が生まれてしまふただ一度溺れただけの浅瀬の海で 高島市 くらたか湖春

今、窓を横切って鳥。時間ってこういうふうにとどき止まる 川崎市 棚田 宏明
 かなしみに貌があるならほとんどが母の寝顔にそっくりだろう 川崎市 二宮 珊瑚
 シリウスは六年前に滅びしとその言説は否定できない 東京 野上 卓
 「あなたはね、東シナ海のある青さ知らないのよ」と友は言いけり つくば市 小林 浦波

伊藤 一彦 選

敬礼の真似し了解言う我に戦争みたい止めよ 言っ孫 周南市 浅田 純子

△評▽孫と作者が入れかわった方が場面としては普通のように思う。自分を論じてくれた孫の成長がうれしかったに違いない。

はじめからインクの出ないボールペン使い続けたような失恋 札幌市 住吉和歌子
 △評▽振り返ってみれば最初からかなわないうはすだった恋。巧みな比喩で真率に歌う。

直してももう使えない下敷きを直してくれた君が好きだよ 茅ヶ崎市 戸川 香織
 君は強く触れたら割れてしまうから餃子の皮に言葉を含む 宮崎 門田 藍子
 切り身にもひかりをのこす鮭の背にいただきますと入れる善先 フランス 小仲 翠太

まっすぐに働く人を冷笑し社畜と呼ぶのはもうやめてくれ 東京 藤沢 静二

前ならば白黒つけて傷つくを引き分け覚え深呼吸する 仙台市 川合 進
 君のいない日常いつしか身にまとう着なれた服であるかのように 藤沢市 野呂 俊江
 レストランの名前だけしか出てこない妻の韓国旅行報告 いわき市 吉田 健一
 空と海くっきり分かち日本海を対馬海流青々 北上市 鶴岡市 佐藤 繁子

米川千嘉子 選

手に馴染むマグカップから壊れてく正しい愛し方を知らない 東京 石川 真琴

△評▽身近で親しいもの、いとしいものから壊してしまうのだ。自分の願う方向から自分で選んでいってしまう悲しみ。

古き良きロックンロールのアメリカを蹴散らし踊るトランプダンス 横浜市 島田 和生
 △評▽ロックは自由を愛する精神そのものだ。それを「蹴散らし」す新しいダンス。

女性として女性首相のその笑顔信じたいです 戦争はイヤ 河内長野市 寺田 愛子
 形見分けのオーガングーのブラウスの静かな花に元氣と言ふ 北九州市 松尾あけみ
 古着屋で服を手ばなす服になら値のつくことをすしし寂しみ 東京 富見井高志

プレゼントにレシート一枚はさまって園児らサンタの存在うたがう 伊丹市 稲本真由美

ヒーローとラブとフライトだけ聞き取れる洋楽かけて介護した日々 広島市 堀 眞希
 世話されるはするより心憂からむを夫は折々「悪いな」と言ふ 日立市 木村 恵子
 平日にぬくぬくとして起きもせずしだいに悔いが沁みわたる 盛岡市 内藤 賢一
 秋長けし思い出入り江の青く映えまぶた閉じれば祖父の鱗の音 京丹後市 縄手 隆雄

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。